

## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト Roland Barthes (1915-1980、仏)

- 思想家、批評家。
- ソシュールの言語観を継承し、構造主義や記号論の視点から、批評活動をおこなう。



## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

### ロラン・バルト『作者の死』(1968)

「〔作者が〕仮に自己を表現しようとしても、、、  
彼が《翻訳する》つもりでいる内面的な《もの》とは、  
それ自体、完全に合成された一冊の辞書にほかならず、  
その語彙は他の語彙を通して説明するしかない。  
それも無限にそうするしかない」(p.86)



→ 記号論的立場から、作者や作品自体が、脱中心的・関係論的に認識されている

## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

### ロラン・バルト『作者の死』(1968)



作者は、自己の創造性のみによって創作するものでもなく、したがって、自らの作品の意味を保証するような中心的・優先的な立場とはならない。

「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(pp.85-86)

「一編のテキストは、いくつもの文化からやって来る多元的なエクリチュールによって構成され、これら、、、は、互いに対話をおこない、他をパロディ化し、異議をとねあう。

しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは、、、作者ではなく、読者である。読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。

あるテキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛て先にある」(p.88-89)

## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



「読者の誕生は、『作者』の死によって  
あがなわれなければならないのだ」 (p.89)

「作者」の中心性・優越性が失われ、一方で、  
「読者」こそが、作品から多様な意味を生み出しうる場となる。

→ 「創造的読み」が許された読者の誕生。作品の創造に参加する「読者」。

## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

ロラン・バルト 『作品からテクストへ』(1971)



## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

### ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



作者が意味をつくる「作品」から、読者が意味をつくる「テキスト」へ

「作者は作品の父であり、所有者であると見なされる。  
それゆえ、、、文学の科学は、作者の原稿や表明された意図を尊重する」(p.99)

「『テキスト』は、その父親の保証がなくても読むことができる。、、、

『作者』が、、、自分のテキストの中に、《もどれ》ないということではない。  
ただ、そのときは、いわば招かれた客としてもどるのだ。

彼〔※ = 作者〕の記名は、もはや特権的、父性的、真理論的なものではなく、  
遊戯的である。彼はいわば紙の作者になるのだ。彼の人生は、、、一個の創作となる」  
(p.100)

## 関係論をみちびく視点 2 : 作家や作品の関係論的な認識

◀ 前へ 次へ ▶ 1 / 1件

### 物語の構造分析



モノガタリノコウゾウブンセキ  
ロラン・バルト著, 花輪 光訳 (BARTHES, ROLAND.)  
東京 : みすず書房, 1987  
[Amazon.co.jp](https://www.amazon.co.jp)で詳細を見る

この本に以下が収録

- ・「作者の死」
- ・「作品からテキストへ」

ブックマーク

#### ● 所蔵 :

	巻号	刷年	所在	請求記号	資料ID	状況	予約・取寄	予約人数	備考
1 <input type="checkbox"/>			相図 : 開架	<b>954</b> <b>B25</b>	158313		<input type="button" value="予約"/>	0	

全て選択

選択解除

巻号ブックマーク